二〇〇六年度福岡女学院大学大学院人文科学研究科
比較文化専攻生　修士論文要旨

『竹取物語』主人公論～竹取の翁とかぐや姫～

平山　ひとみ

日本人なら誰もが知る『竹取物語』。この物語の名称は、今日では一般に『竹取物語』と記されるのが普通である。ところが、『源氏物語』の絵合では、『竹取の翁（の物語）』と記され、蓬生の巻では、『かぐや姫の物語』という名称が用いられている。このように、その作品名は固定的なものではなかった。しかし、宮廷の晴れの場で『竹取の翁（の物語）』と呼ばれていることから、これを正式な物語の名前とすべきだろう。

実際、かぐや姫の出生から昇天までを語る物語であるが故に、『かぐや姫の物語』と呼ばれているものを『竹取の翁の物語』と呼びなおしたりするよりも、『竹取の翁の物語』とあるのをその内容にふさわしく『かぐや姫の物語』と便宜的に呼びなおしたとするほうが、よほど自然なのである。

ところが、『竹取物語』は伝本の数もゆうに百を越すといわれている。しかも、最古の写本は一五九二年書写の武藤本（武藤元臣旧蔵本）であり、江戸時代が目の前に迫っている。成立の予想される平安時代から隔たること、七百余年である。この長い年月の間にも、『竹取物語』の写本はおびただしい数で作られていたと思われるのに、まとまった本の形で残るのは武藤本だけである。他は、一部分を記した文書が何枚か伝わっているにすぎない。

こうした事情が、成立時の原本を復元する作業を、困難にしている。今現在は、原本をめざして校定された本文に頼るしかない。

また、現存する伝本のうち正統なすものの概ねは、『竹取翁物語』であり、『竹取物語』と題されている伝本の場合も、『竹取（を業とする翁の）物語』の謂いであって、『かぐや姫の物語』と題する本は全く無いのである。つまり、作品名からすれば、物語の本当の主人公はかぐや姫ではなく、竹取の翁になるのではないか。

このように考えると、『竹取物語』の主人公は、竹取の翁とかぐや姫のどちらなのだろうか。小研究では、『竹取物語』を読み直し、竹取の翁とかぐや姫のどちらが主人公なのかを明らかにするのが目的である。

現在、『竹取物語』は、かぐや姫を主人公とし、かぐや姫に視点を置いて読まれている。

かぐや姫は、竹の節の中から貧しい竹取の翁に見出される。そして、光にちなんだ名前を命名され、その名前のように美しく成長する。そして、様々な男性からアプローチをされるが断り、周囲に反対されつつも月を眺める。やがて月の住人であることが分かり、十五夜に月からの迎えと共に月へと昇天してしまう。しかし、竹取の翁たち夫婦や帝には手紙と不死の薬を残していくのである。これがかぐや姫を主人公とした視点から読んだ『竹取物語』である。

しかしこれは、『竹取物語』をかぐや姫の成長の様子、つまり、「異界から来て去ることを物語とした作品」であると捉えたときである。つまり、『竹取物語』にはもう一つの読み方があるのである。

貧しい竹取の翁が、いつものように竹を取る為、野山へ行った。すると、いつもとは違い、光る竹があった。その竹の節の中からかぐや姫を発見し、金銀財宝を得られるようになり、長者となる。そして、成長したかぐや姫に結婚を勧める。また、月を眺めるかぐや姫を咎めた。やがて竹取の翁は、かぐや姫とは違う地上の住人であること

を悟り、月からの迎えになすすべも無く、かぐや姫の昇天を見送る。そのときに、かぐや姫から不死の薬を手紙と共に貰い受けるが、不死の薬は使わなかった。故に、やがて死を迎えるのである。

このように、『竹取物語』は「異界から来た姫とめぐり合って地上人と悟ることを物語とした作品」であるとも捉えることができる。つまり、竹取の翁を主人公とした視点からも『竹取物語』は読めるのである。

これは、かぐや姫と竹取の翁の関係が対等な立場にあることを示している。また、同時に、二人を切り離しては考えられないことを示している。

つまり、『竹取物語』は、かぐや姫を主人公として読めるのはもちろんのこと、竹取の翁を主人公としても読むことができる。言い換えると、『竹取物語』は、かぐや姫と竹取の翁の両方が主人公となる物語であり、二つの視点から読むことができるのである。